

～はじめに～
虫の目・鳥の目、歴史の目、そして。。

1970年の寒い冬の朝のことです。

洗い髪を輪ゴムでまとめ、生活に疲れはてたという風情の私は、2人の男性とタクシーで郊外に向かっていた。

車の中は、アルコールと胃からもどした“小間物”のすえた臭いが充満。

「ごめんなさいね」と謝る私に、運転手さんは言いました。

「あとで洗うから心配しないでいいよ。それより、こんなアル中の亭主もっちまって、オカミさんも大変だねえ」

私は、ひどく気が咎めました。

緊張して、いり飲んで酔うことができず、台所の味噌まで飲み干して眠りこんでいる大熊一夫。アル中の友達といった顔だちの先輩記者、佐藤国雄さん、この3人で「共謀」して、精神病院に潜入しようとしていたからでした。

親しくしていた作家のなだ・いなださんに、「分裂病の真似をして精神病院に潜入しようと練習しているのだけれど、見破られそうで心配」と打ち明けたところ、「ベロンベロンに酔って家族がつれていけば、簡単に入院できる」と、智恵を授けてくださったのでした。

なだ・いなださん、実は、フランスで修業したアルコール依存症のパイオニアで、「堀内秀先生」と慕われるお医者さんでもありました。

病院の門をくぐると、すべてがずらすと運びました。屈強な男が出てきて腕をつかみ、鉄格子の向こうへ。追いかけていたら職員は叫びました。

「家族は、ここからはご遠慮くださいッ！」

慶応大学医学部出身の精神科医が院長、『甘えの構造』で高名な土居健郎さんが顧問をつとめ、聖路加国際大学の看護の実習病院。碧水荘という美しい名前のこの病院は、札付きの悪徳病院ではありませんでした。

けれど、そこは、ひとことで言えば「人間捨て場」でした。作業療法という名の内職の強要、脅しに使われる電気ショック、暖房のない凍えそうな雑居部屋……。

朝日新聞に連載された『ルポ・精神病棟』は反響をまきおこし、本はベストセラーになりました。

ただ、世の中は、ほとんど、変わりませんでした。

「自分とは関係ない世界の話」と思われていたからでしょうか。

それから半世紀たった2023年2月、NHKが、ETV 特集「ルポ 死亡退院 精神医療・闇の実態」を放送しました。

新聞連載と違うことがありました。

冒頭、ドスのきいた声がありました。

准看護師A: すいませんじゃねえよ！日本語わかんねえのか？オラ！

看護師B: また泣くのか？泣いたらゲンコツで叩くぞ、お前！

しきりに謝る患者と、居丈高な職員。

見ている人は、自分自身が、縛られたり、殴られたり、怒鳴られたりしているような気がして、たまらなくなったそうです。

取材班は、10年分1498人の患者リストを入手し、それをもとに緻密な分析を展開しました。約8割にあたる1174人が、死亡しての退院であることを、つきとめました。

カルテの記載と診療内容を照合すると、不必要・不適切な処置だらけでした。

身体拘束が日常적으로おこなわれていました。

にもかかわらず、東京都の監査では「A」と評価されていました。

「アカデミズムとジャーナリズムは、近代が生み落とした不仲の兄弟のようなもの。たがいの作法や思考の筋道を信用できないでいる」といわれます。

この「不仲な2つの作法」を融合して、前例を超え、前例を創る道をさぐろうと、この本では、9人のジャーナリストが4つの方法で迫りました。

まず「虫の目になって入り込む」、次に「鳥の目になって世界を飛び回る」、さらに「歴史の目」でさかのぼる。

4つめは、あとがきで。。。